

2024 年度 国際ユース作文コンテスト
最終選考結果および上位入賞作品

テーマ：「対立を超えた私の体験」

公益財団法人 五井平和財団
www.goipeace.or.jp

2024.10.31

2024年度「国際ユース作文コンテスト」開催にあたって

この度、2024年度「国際ユース作文コンテスト」が盛大に開催されましたことを、心よりお祝い申し上げます。

関係者の皆様におかれましては、日頃から多様で活発な活動を展開され、世界の平和と持続可能な社会・地域づくりに多大なる御尽力を頂いていることに、深く敬意を表しますとともに、心から感謝申し上げます。

今回のコンテストでは、「対立を超えた私の体験」というテーマのもと、世界152か国の子供や若者たちから、15,744点にのぼる作品の応募が寄せられたと伺っております。

その中で今回、文部科学大臣賞を受賞されましたお二人をはじめ、各賞を受賞された皆様、誠におめでとうございます。

先行きが不透明で予測困難なこれからの時代を生きる若者たちにとって、多くの人との交流の中で、時には対立しながらも、それを乗り越え、互いに理解と尊重を深めていく経験はとても大切なことだと思います。

「国際ユース作文コンテスト」では、毎回素晴らしい作品が数多く寄せられていると伺っております。このような取組を通じて、次代を担う世界中の若者が交流し、世界の平和と持続可能な社会・地域づくりにつながることを祈念しております。

令和6年10月31日

文部科学事務次官 藤原 章夫

2024 年度 国際ユース作文コンテスト受賞者

テーマ：「対立を超えた私の体験」

参加国数：152 カ国

応募総数：合計 15,744 作品（子どもの部 5,511 作品、若者の部 10,233 作品）

※学校名、年齢等の受賞者情報は、募集締切日（2024 年 6 月 15 日）時点のもの

文部科学大臣賞（最優秀賞）（各 1 点）

<子どもの部>

- 「対立を克服した僕の経験」
ミルザ・チャタク（ボスニア・ヘルツェゴビナ）14 歳

<若者の部>

- 「相手の意見に耳を傾ける」
アドカムジョン・ジャノビディノフ
（ウズベキスタン＜米国在住＞）19 歳

優秀賞（各 3 点）

<子どもの部>

- 「悲しみに打ちひしがれて」
リー・カイア（シンガポール）11 歳
- 「相手の考えを受け入れる」
園部 真菜（京都府
／京都先端科学大学附属中学校高等学校）13 歳
- 「私の過ちと気づき」
小林 律仁（東京都／大田区立大森第六中学校）13 歳

<若者の部>

- 「蘭嶼（オーキッド島）の大空の下で」
匿名（大阪府在住）
- 「嵐の後の虹」
キウ・ザー・バオ（ベトナム）20 歳
- 「あるアフガニスタンの少女の成功物語」
ジャミラ・フサイニ
（アフガニスタン＜米国在住＞）22 歳

入選（各 5 点）

<子どもの部>

- 「荒波を乗り越えて」
マーク・ウォルトン（インドネシア）10 歳
- 「二人きりの短い道德の時間」
小袋 秀悟（東京都／国本小学校）11 歳
- 「意見の隙間」
大塚 和々（兵庫県／三田市立八景中学校）13 歳
- 「ヘッドホン」
松尾 莉愛（東京都／洗足学園中学高等学校）13 歳
- 「目に見えない戦い」
ジャスミン・チョン・マン・ヤン（マレーシア）14 歳

<若者の部>

- 「生きるために私を奮い立たせてくれた母の死」
シャリーン・ハリジャント（インドネシア）15 歳
- 「選択肢と価値観の対立」
北村 華桜里（大阪府／城南学園高等学校）18 歳
- 「愛を選ぶ」
ナー・アマヌア・アックワー（ガーナ）18 歳
- 「畑と川に流れる血を止める」
ボルワティフェ・ホーリネス・アラグベ
（ナイジェリア）21 歳
- 「立ち直ろう」
タマレ・エノック（ウガンダ）23 歳

佳作

＜子どもの部＞ 22 点

- イヤー・ザカリア（カナダ）8 歳
- デビヤニ・チョウハン（インド）9 歳
- バルシニ・バルサラ（東京都）9 歳
- 横塚 由利奈（東京都）11 歳
- 三浦 蒼葉（東京都）13 歳
- 山本 彩紗（東京都）13 歳
- 柴田 彩寿（兵庫県）13 歳
- ジャシル・ジスコ（ボスニア・ヘルツェゴビナ）13 歳
- ジョエル フォン（東京都）13 歳
- 利根川 快斗（東京都）13 歳
- 真部 英（福島県）13 歳
- ラミヤ・エスマ・ガレシッチ
（ボスニア・ヘルツェゴビナ）13 歳
- ナジバ・イスラム（バングラデシュ）13 歳
- 石田 乃羽（兵庫県）13 歳
- チャン・チュック・ガン（ベトナム）13 歳
- 古市 結衣（東京都）13 歳
- ダニ・パトコビッチ（ボスニア・ヘルツェゴビナ）14 歳
- イロエグブナム・アカチュクウ・エマニュエル
（ナイジェリア）14 歳
- 村下 乃愛（東京都）14 歳
- シャズマ・サブリ（スリランカ）14 歳
- 張 優瀾（中国＜兵庫県在住＞）14 歳
- 高橋 はぐみ（東京都）15 歳

＜若者の部＞ 25 点

- アルマーン・タフティ（インド）15 歳
- アワイザ・ノマン（パキスタン）15 歳
- ブティンバエフ・エミール（カザフスタン）15 歳
- イシンビ・クンドワ・ガブリエラ（ルワンダ）15 歳
- 新田 結唯（京都府）15 歳
- アブド・エルラフマン・モハメド・アデル（エジプト）15 歳
- 田中 陽菜（埼玉県）16 歳
- リサ・リーバス・サトウ（ブラジル）16 歳
- マリアンナ・カリーナ（アルゼンチン）16 歳
- オグベイド・ジョイス（ナイジェリア）16 歳
- アリーナ・マリア・ジョビン・モンテロ
（ドミニカ共和国）17 歳
- ディビヤン・アル・チャンドラセカラン（マレーシア）17 歳
- ヒンドリ・ロイ（インド）17 歳
- 山内 あかり（京都府）18 歳
- ダニー・ラウル・アローバ・ブエナーニョ
（エクアドル）18 歳
- エリヤ・デイビッド・ウマ（ナイジェリア）18 歳
- カイラット・ジモー（ナイジェリア）19 歳
- ズジャジャ・シャイフ（日本）19 歳
- ハイター・ガブリエル・パローゾ・ライス（ブラジル）20 歳
- マリア・エドゥアルダ・チャガス・ビアナ・クルス
（ブラジル）20 歳
- サン・バンナイ（カンボジア）20 歳
- 井手 南（東京都）21 歳
- ラウラ・フェレイラ・ラモス（ドミニカ共和国）23 歳
- ウドゥアク・ウドウド・ウクポン（ナイジェリア）23 歳
- ウカチュクウ・エマニュエル（ナイジェリア）25 歳

学校特別賞（5 校）

- 大田区立大森第六中学校（東京都）
- 京都先端科学大学附属中学校高等学校（京都府）
- 須磨学園中学校（兵庫県）
- 東京学芸大学附属世田谷中学校（東京都）
- 東京都立大泉高等学校附属中学校（東京都）

学校奨励賞（16 校）

- 鹿児島市立鹿児島玉龍中学校・高等学校（鹿児島県）
- 晃華学園中学校高等学校（東京都）
- パピア国立高等学校ジャーナリズム特別プログラム
（フィリピン・イロイロ市）

- サイラン・インターナショナルスクール
(スリランカ・ガンパハ市)
- サトリウィタヤ学校 (タイ・バンコク都)
- 昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校 (東京都)
- スリ・ニパー国民中等学校 (マレーシア・クランタン州)
- 聖ヨゼフ修道院学校クエッタ校 (パキスタン)
- 覚民国民型華文中学 (マレーシア・ケダ州)
- 東洋大学京北高等学校 (東京都)
- ビーコンハウス・スリ・イナイ・インターナショナル
スクール (マレーシア・セランゴール州)
- 福島県立あさか開成高等学校 (福島県)
- マザーランド中等教育学校
(ネパール・ポカラレクナス市)
- 松本秀峰中等教育学校 (長野県)
- マレーシア科学大学 (マレーシア)
- 山ノ内町立山ノ内中学校 (長野県)

* 当財団ウェブサイト <https://www.goipeace.or.jp/work/essay-contest/> にて、入選・佳作を含む、全ての受賞作品
がご覧いただけます。

国際ユース作文コンテスト選考委員 (* 敬称略・50 音順)

委員長	千 玄室	茶道裏千家前家元、ユネスコ親善大使
	西園寺昌美	公益財団法人 五井平和財団会長
	都倉 俊一	作曲家
	成田 純治	株式会社博報堂相談役
	服部 真二	セイコーグループ株式会社代表取締役会長兼グループCEO 兼グループCCO
	松浦晃一郎	一般社団法人 アフリカ協会会長、元ユネスコ事務局長
	美内すずえ	漫画家
	矢崎 和彦	株式会社フェリシモ代表取締役社長
	葉 祥明	絵本作家
主 催	公益財団法人 五井平和財団	
後 援	文部科学省、日本ユネスコ国内委員会、日本私立中学高等学校連合会、 東京都教育委員会、NHK 日本経済新聞社	
協 賛	セイコーグループ株式会社、プラス株式会社	

対立を克服した僕の経験

（原文は英語）

ミルザ・チャタク（14 歳）

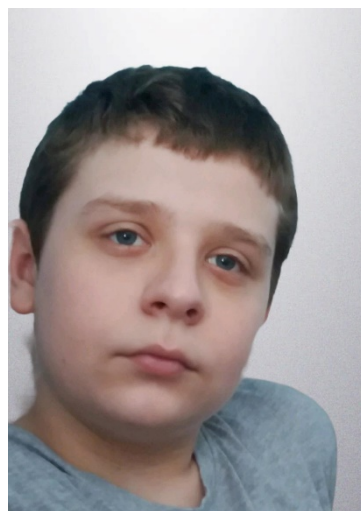
ボスニア・ヘルツェゴビナ

メシャ・セリモビッチ中学校（サラエボ市）

その日も気持ちのいい朝で、誰もが新たな一日の始まりを楽しみにしていました。僕を除いては。

僕の苦しみは今に始まったことではありません。僕の苦難の物語はずっと前に始まっていたのです。

僕は、運命によって本来の予定日より早くこの世に生まれてきました。僕には生まれた時から呼吸障害があり、医師によると、僕の肺はまだこの世界で生きられる準備ができていなかったそうです。長い苦闘と治療の末、僕はようやく家に帰ってこられましたが、完全に健康になった訳ではありませんでした。病気のせいで外出する時は常に呼吸マスクを着けなくてはならなかったのです。



僕は子ども時代のほとんどを自分の部屋で過ごしました。他の子たちが公園で遊ぶ姿を見るのが楽しみでした。芝生の上に寝転んだり、友だちと遊んだりするのが夢でした。でも、自分にはそれが無理だと分かっていました。

時が過ぎ、僕は成長し、学校に通い始める日がやってきました。僕は喜びました。やっと友だちができると思ったからです。

しかし、残念ながら、僕の喜びは長く続きませんでした。入学初日に不愉快なサプライズを受けたのです。校庭に男子の集団が立っていました。彼らは、僕がマスクを着けているのを見ると、指を差しながら笑い始めたのです。僕は恥ずかしくなりましたが、反応したくありませんでした。すぐに終わると思っていたからです。しかし、それは日に日にひどくなりました。彼らは僕を不当に扱い、笑いものにし、軽べつ的な名前で呼びました。他の子たちは、恐れをなしてか、彼らに何も言うことができませんでした。僕は彼らと友だちになろうと懸命に努力しましたが、僕に味方してそばにいてくれる子は誰もいませんでした。

僕は何もかも嫌になりました。学校に行く気も起きず、勉強する気にもなれませんでした。頭の中に浮かぶのは僕のことをあざけり笑った、彼らの顔ばかりでした。僕は再び失望し、孤独になりました。

どうしたらいいかずっと考えていました。恥ずかしくて両親には言いたくなかったし、卑怯者と思

われたくなかったので、先生たちにも言いたくありませんでした。でも僕を傷つけてくるので彼らのことをもはや無視することもできませんでした。言い返したりもしましたが、何も改善しませんでした。ただ悪くなる一方だったのです。ある日、その集団の一人が僕を追いかけてきて、マスクをはぎ取り、路上に投げ捨てました。僕は呼吸が荒くなり、やっとのことで家までたどり着きました。

この対立のせいで僕は完全に打ちのめされた気分になりました。どうしたら事態を改善できるのかわかりませんでした。他者との対立がいつの間にか自分自身との葛藤になり始めました。僕は自分のことが嫌いになりました。心がぼろぼろになりました。自分との葛藤は他者との対立よりも深刻でした。なぜなら他者から逃げることはできても、自分自身から逃げることはできないからです。

なぜ彼らは僕の病気や苦しみ、困難を理解しないのかと思いました。僕はただ友だちが欲しい、ごく普通の男の子なのに。

そこで僕はこの対立を解消しようと心に決めました。校庭で彼らを見つけると、自分のすべての力を振り絞って彼らの前に立ちはだかりました。彼らはけげんそうな顔で僕のことを見ましたが、僕は自信に満ちあふれていました。僕は冷静に、彼らの態度に傷つけられたことを伝えました。そして自分の病気を理由に差別されるのは嫌だけれど、彼らに対して腹は立っていないし、友だちになりたいと言いました。彼らは恥ずかしそうに、うつむいて立ち尽くしていました。その中の一人が近寄ってきて僕を抱きしめてくれ、他の子たちもそれに続きました。生まれて初めて僕は心から幸せな気持ちになりました。

それ以降、僕たちの間に対立は起きていません。友だちはいつも僕のそばにいてくれます。僕を助けてくれたり、体調が悪い時は宿題を持ってきてくれたり、いつも見舞いに來てくれます。

これは僕たち全員が知っておくべき教訓だと思います。どんな対立でも逃げ出してしまっただけは解決しません。隠れたり、無視したりしてはならないのです。病気と同じように、対立と向き合い、対処しなくてはなりません。すべての対立は理解と愛で乗り越えることができます。憎しみは問題を大きくするだけだからです。僕たちは愛のために生きるべきです。

人生とは、お互いに手をつなぎ、一緒に歩いて渡らなくてはならない橋なのです。

相手の意見に耳を傾ける

（原文は英語）

アドカムジョン・ジャノビディノフ（19 歳）

ウズベキスタン＜米国在住＞

2022 年、私は米国の大学の学士課程で学び始めたが、初めての海外だったので、数カ月にはたってカルチャーショックを経験した。私たちの大学では、新入生向けに大学に馴染むのを助ける FYS という特別講座が提供されている。私が履修したのは、「相手の意見に耳を傾ける」という講座だ。哲学に関連する講座で、主に自分とは相容れない意見や声に耳を傾けるという内容だった。講座では、言論の自由、ジェンダー平等、地政学など、とても難しいトピックについて議論した。このようなトピックについて誰かと議論した経験がなかった私にとって、当初は授業の議論に参加し、考えを述べるのはとても難しいことであった。やがて徐々に、ウズベキスタンで育



つ中で私が培った、文化的価値観や視点によって形成された意見を述べることで、議論に加わるようになった。面白いことに、クラスのほとんど全員が、私に反対したり、私の意見はおかしいと言ったりした。恐らく、私がクラスで唯一の留学生で、文化的に保守的なバックグラウンドの出身者だからだった。とりわけ宗教や文化的慣習についての議論では、こうした意見の相違が顕著であった。クラスメートたちは、イスラム国家やイスラム主流国に対して、全く異なる考えを抱いていたのだ。私はかなり孤立し、衝突を避けるためにクラスの議論から遠ざかるようになった。しかし、クラスでの議論は成績のかなりの部分を占めていたため、私は担当教授に状況を説明することにした。教授は、私に代わりの課題を与えることも可能だと言いつつも、たとえ考えが異なっている、議論に参加し続けるよう勧めてくれた。また、この講義の主眼はまさに、相手の意見に耳を傾けること、自分が反対する考えにも耳を傾けることである、とも話してくれた。

その時以来、自分の意見とクラスの意見との間の対立は、自分自身の立場を批判的に問い直し、ディベートのスキルを向上させるための機会だと思えるようになった。毎回議論の前に準備をし、自主的にリサーチを行い、自分がクラスの議論で述べる意見の一つひとつの裏付けとなる証拠を集めることを始めた。日が経つにつれて、私は自分の考えについて、また、ある信念を自分がどのように形成してきたかについて、より深く理解することができた。また、クラスメートのほとんどは、イスラム教につ

いて非常に限られた理解しかなかったり、ウズベキスタンのようなコミュニティベースの社会で生活したことがなかったりしたので、私はクラスメートの視点から状況を考え、捉えようと試みた。それ以降の議論の際は、クラスメートの意見を即座に否定するのではなく、自分の経験を説明したり、幾つかのトピックについては、クラスメートたちの知識が不足していることを論証したりした。何回かの授業が終わると衝突はなくなり、議論は友好的なものになった。クラスメートたちは、宗教や国際的なトピックについての知識が不足していたことを認識し、それらのトピックで議論する際には、私に意見を求めたり、私の発言を尊重してくれたりするようになった。同様に、私が苦手とする米国政治についての議論では、クラスメートたちの意見を尊重し、理解するように努めた。講座が終わる頃には、私たちはお互いに学び合うことができた。自分の主張に共感的でない人々と、どのように関わるべきかを私が理解するために、対立する体験は必要だったのだ。

このイデオロギー上の対立から得た最大の教訓は、私たちは時として、お互いの意見が理解できない場合に、すぐに否定し口論を始めてしまうということだ。しかし、この種の対立の最良の解決策は、自分たちの分からないことを認め、お互いを尊重しながら議論することだ。そのようにして、尊敬し合うことで、社会の誰にとっても役立つ、創造的なアイデアを共に生み出すことができる。この経験を通して、違いに着目するのではなく、共通理解を築くことに重点を置き、異文化による対立に取り組む方法を形成することができた。また、このような対話によって視野が広がるのを感じながら、国際的なレベルでさらに勉強を続け、キャリアを追求するようになった。エコノミストを志す私は、国際的な企業に就職し、低所得国の経済発展に貢献したいと考えている。このようなキャリアには、様々なバックグラウンドを持つ人々との交渉や対話が多く求められる。FYS 講座での経験が、こうした交渉の予習になり、平和な世界に貢献できる人間になるのに役立つと、私は信じている。

悲しみに打ちひしがれて

(原文は英語)

リー・カイア (11 歳)

シンガポール

ナンファ小学校

不吉な白い壁が無表情に私を見つめ返してくる。カーテンの隙間から、チューブの網に捕らわれた病弱な人の姿が見える。時計がチクタクと時を刻む中、ひそひそ声が聞こえる。チューブだらけのベッドに横たわる彼の青白い顔にはシワが広がっている。

——おじいちゃんの笑い声はどこへ行っちゃったの？

「…余命 6 カ月…化学療法も選択肢の一つ…」。白衣を着た恐ろしい預言者が話すプロ意識たっぷりの冷たくて重苦しい言葉が聞こえてくる。

——いやだ。

みんな否定できない事実を知っている。おじいちゃんにはもう時間がない。私の小さな手がカーテンを握る。突然寒く感じる。モニターの冷たいビープ音は私の心臓の鼓動を痛々しいほど映し出している。

——やめて。

カーテンが開く。見慣れた丸まった背中では以前よりも小さくなったように見える。父の震える指がタバコを取り出そうとしている。

「…治療は痛みを伴うことをお伝えしておきます…」という医師の言葉の重みがのしかかる。

「治療費は私たちが出します」。タバコを元に戻しながら、父は鍛え上げられた肩を真っすぐに正し、その選択をした。でも母の考えはどうだろう。

「もう楽にさせてあげるべきよ…」

「だめだ！」。父の大きな声。大き過ぎる。おじいちゃんのまぶたが、苦しそうな顔の上でピクッと動く。ちらっと目を開けた後、まぶたは閉じられた。大声が静まる。

「なぜ？」。母は父の答えを知っている。
ピッ。ピッ。モニターは待ってくれない。
「逝かせることなんてできるものか…」

——沈黙。

「ずっとしがみついているわけにはいかないわ。いつかお父さんの痛がる顔しか見られない日がやって来るわ」と、うなだれている父に、母はナイフで刺すようにささやく。「それはあなたのわがまま…」と言いかけたところで、「違う！」と、まるで王様が命令を出す時のようにきつい言葉が母の言葉をさえぎり、その場に不安定に漂う。

「うそはやめて。お父さんに幸せでいてほしくないの？ お父さんのことを愛していないの？ 私は愛しているわ。父親でもあるし、あなたと違って私はお父さんのことを愛しているのよ」。その震える声が嗚咽に変わり、涙が母のほほを流れ落ちる。

私はそこに立ちすくみ、めまいを感じながら私の人生の二つの柱が崩れていく様子を見ている。何も感じない。どうして頭の中が空っぽなのだろう。どうして心が冷え切っているのだろう。

——なぜなのか分かっている。

「苦しませるわけにはいかないわ！ お父さんを見て。ほら！ 穏やかな顔をしているでしょう…。残りの時間を安らかに過ごさせてあげるべきよ」と母は再び訴えた。

「どうしてそんなことが言えるんだ？ 僕はお父さんを愛している。どうしてあきらめられるんだ？ 生きていてほしい。だって…父親だから…」。父の言葉が私の耳の中でこだました。

——どっちも正しい。みんなおじいちゃんのことを愛している。それは認める。でも二人が何と言おうと、こんなことはもう終わらせなくちゃいけない。

私は小さな手でザラザラとした布をぎゅっと強くつかみながら、前に歩み出た。家族をつなぎとめたくて。

涙を浮かべた目が私の方を向く。少ししてから、両親の唇が左右に伸び、ほほ笑みが浮かぶ。

「ママ、パパ、泣かないで！ イエイエ¹は私たちのことを愛してくれているし、私たちもイエイエを愛しているでしょ？ きっと自分のことでみんなに悲しんでほしくないよ。イエイエのためにも強くなしないと。乗り越えて…選択しなきゃ。どんな選択でも、それは最善の選択なんだよ。大好きなイエイエのことなのに、わがままになっちゃダメだよ！ 私たちは家族なんだから、一緒に乗り越えよ

¹ イエイエ：中国語で父方の祖父を意味する

うよ…」私の口から言葉がこぼれ出るのと同じくらいの速さで、涙がほほを伝った。その場の空気から怒りの感情が溶けてなくなり、しわくちな手が私の手を包み込む間、私は驚き、目をぱちぱちさせた…。

沈黙の後、みんな涙ぐんだ笑顔になった。私たちみんなで決めた。どんな選択をするかは問題ではなかった。良くも悪くも、私たちはお互いを理解し、一つの家族としての愛、即ち希望、受容、そして愛情を分かち合っている。

どれだけの家族が、怒りではなく、愛から生まれた対立で壊れてしまっただろう。愛する人を手放すことができずに家族同士が敵対してしまう時、どんな気持ちになるか分かる。誰も悪くない。大切な人を愛することは誰にも非難できない。私たちには相手を受け入れ、その愛を理解し、その考えと和解することしかできない。共に祈り、一緒に思い残すことなく泣くこと。それが前に進むためのたった一つの道、たった一つの希望の道だ。私たちは、粗末な家に暮らしていようと、戦火の中にあろうと、時には誰もが自分が愛するもののために戦っているだけだということに気づく必要がある。それができて初めて愛するものを大切にし、自分の大事な人々を守ることができるのだ。

相手の考えを受け入れる

(原文)

園部 真菜 (13 歳)

京都府

京都先端科学大学附属中学校高等学校

私は、これからの未来を創り上げていく中で自分とは異なる考えを持つ人と対立した時、互いに相手の考えを受け入れ協力することが大切だと思います。

私が小学 6 年生で卒業するまで残りわずかだった時に、休み時間のドッジボールの遊び方で対立が起き、クラスで遊び方について見直すことになりました。その中で異なる二つの考えがぶつかっていました。A 君は、試合が盛り上がってくるとラインを越えてボールを投げる人がいるからルールはしっかり守って遊びたい。一方、B 君は、ルールを守ることは大切だけど、休み時間は短いのだから、ルールばかり気にするのではなくできるだけ長く遊びたい。どちらの考えももっともですが、それぞれ遊び方が違うのなら、ルールをしっかり守ってやりたい人と長く遊んでいたい人と別れて休み時間は遊べばいい、という意見が出ました。すると、先生が「もう少しで卒業なのにクラスが別々になって遊ぶの？これから成長していく中で、自分と異なる考えの人と出会ったとしても、その人とは関わらないの？それは違うと思う」と言いました。その後、ラインをはみ出し過ぎてはいけませんが、多少のはみだしは多めに見て、できるだけ長くみんなで遊ぶことになりました。

互いに自分の主張が正しいと思わず、相手の自分とは異なる考えを受け入れ話し合うことで、より良い考えが生み出されたのです。

私は、あの時、先生が言った「これから成長していく中で、自分とは異なる考えの人と出会ったとしても、その人とは関わらないの？」と言う言葉が、今もずっと心に残っています。確かに自分とは異なる考えの人と関わらなければ対立は起こらないかも知れませんが、対立を起こす方が良いというわけではありませんが、対立することをずっと避けていては、新しい考えは生まれませんし、何も変わりません。問題は解決しないと私は考えます。

私は、「対立」と言うのと誰かと争うようで、嫌なイメージがありました。でも、あの時、A 君と B 君が対立していた時には、二人とも争っているようには見えませんでした。むしろ協力し合っているように見えました。二人とも、どちらの考えが正しいかを決めるのではなく、みんなが楽しく遊ぶという共通する目標に向けて、自分の主張を相手に伝えていたからです。また、互いに相手の考えを受け入れていました。私は、「対立」と言うのは自分とは異なる考え方を知り、互いに自分の考えを伝え合い、相手の考えを受け入れ合い、より良い新しい考えを協力して生み出せるチャンスだと思いました。

大人も子どもも世界中の誰もが、人生の中で誰かと対立することがあるでしょう。そんな時、自分の考えが絶対と思い相手の考えを否定すれば、対立することは争うことへと変わってしまいます。なので、誰かと対立した時には、自分の考えを相手に伝え、自分と異なる相手の考えを受け入れ、対立することをより良い新しい考えを互いに協力し生み出すチャンスへと、変えることが大切だと思います。

何度も同じことを言いますが、人間誰もがそれぞれの考え方や価値観や視点を持っているからこそ、対立は避けられません。ですが、対立することは悪いことではないのです。大切なのは、相手の考えを受け入れ、協力し合えるかどうかだと私は思います。

私の過ちと気づき

(原文)

小林 律仁 (13 歳)

東京都

大田区立大森第六中学校

中学 2 年生の春、私は初めて友人と大喧嘩をした。発端は、些細なことだった。2 クラス合同の体育の授業で、クラス同士が競い合っていた。徐々にヒートアップし、お互いに気が立ってきた時に、ちょっかいを出され、私が「やめろよ！」と大声を出すと、隣のクラスの友人が私に向かって「消えろ〇〇人」と言った。ショックだった。〇〇人は、私の国籍ではない。だが、私のクラスにはその国籍の友人もいた。当然その友人の耳にもその言葉は聞こえたはずだ。私は日頃ニュースやネットの世界を通して、世の中には国籍を理由に侮辱する人間がいることを知っていた。私たち日本人が侮辱する側になることも侮辱される側になることもあることを知っていた。けれど、その時その瞬間まで、自分の身の回りでそのような差別を目にしたことはなかった。

私は猛烈に腹が立った。その国籍は私自身には当たらなかったけれど、そんなことは問題ではないと思った。差別そのものが許せなかった。自分の悪口だったら我慢できたかもしれない。でも、その侮辱した友人も私の大切な友なら、侮辱された国の友人も大切な友だから、それ以上の侮辱を口にしてほしくなかった。それで思わず、侮辱した友人の身体を掴んで揉み合った。怪我をさせてはいけないと考えるだけの理性は持ち合わせていたが、私は本気で怒っていた。

その後、私たちは先生に呼ばれて注意を受けた。友人もひどく叱られたようだった。当然だ、と私は思った。いい気味だとすら思った。私はまだ腹が立っていて、自分のしたことを一切後悔していなかった。

その日、家に帰ると、母に「話すことがあるよね？」と言われた。担任の先生が、今日のことを母に電話で報告したらしい。私はその日あった出来事を順を追って説明した。「でも消えろ〇〇人だなんて、許してはいけない。絶対に口にしてはならないはずだ。(この国籍の) 友人がひどく傷ついたと思う。だから私は間違ったことをしていない」と言った。すると母は「差別はいけないことだ。友人を大切に思う気持ちもわかる。でも、正しい者は正しくない者に何をしてもいいのか」と言った。私は言葉に詰まった。頭をガツンと殴られたような気がした。

その時まで私は、私の考えは正しい、だから私の行動も正しいと思っていた。でも、私の考えが「正しい」という一点のみをもってして、私が「正しくない」者に何かをする権利を得たわけではない、ということに初めて気がついた。「正しい」者なら「正しくない」者に何かをしてもいいという考えは、

極端に言えば、「正義」を振りかざして SNS で見ず知らずの人を中傷したり、戦争中に相手国の者を迫害したり、しつけと称して子を虐待する人間と一緒にではないか。

ドクンと胸がなった。自分が知らず知らずのうちに恐ろしい考えになっていたことに気がついた。私はそういう人間にはなりたくない。私は自分の過ちに気付いた。私と友人は先生に促され、和解した。

後日、彼がそんな言葉を発したのは、スポーツをしていた時に、たまたまその言葉を耳にして、相手を刺激する言葉だと思ったからだを知った。つまり、彼には真に差別心や思想があったわけではなく、深く考えずに、ただ無知で悪口を真似していたのだ。私は彼に、知ってほしい、と思った。その差別や侮辱に、どれだけの人が苦しみ、悲しい思いをしてきたのかを。誰かにとっての何気ない一言が、人をどれだけ深く傷つけるのかを。

そして私と彼の間不足していたもの、つまり、私たちの対立を取り除くために真に必要なものは「対話と理解」であることを知った。私はそれ以上差別発言をしてほしくなかったから揉み合った。だがこれは失敗だった。表面上で押さえつけても根本的に解決しないと意味がないのだ。私たちはもっともっと知らなくてはならない。世界のこと、その歴史、お互いのこと、そして自分自身のことを。私はこの「気づき」を忘れない。

蘭嶼（オーキッド島）の大空の下で

（原文は英語）

匿名

大阪府在住

同志社国際中学校・高等学校

同じ言語、似通った文化と伝統、共に長い歴史を持つ台湾と中国。台湾と、中国文化発祥の地であり、広大な領土と豊富な資源を有する中国は、1949 年以来、政治的紛争とイデオロギーの対立に巻き込まれてきた。国共内戦後、中国本土と台湾の状況は宙ぶらりんの状態にあり、異なるイデオロギーと政治システムを有する両者の対立は、今日まで続いてきた。

7 年前、僕は台北のような大都市を選ぶ代わりに、初めて両親と台湾の蘭嶼（オーキッド島）を訪れた。僕は中国の小学校に通い、台湾の人々が如何に無知で、利己的で、視野が狭いかという愛国教育を受けていた。自己認識が欠けていた僕は、相容れない対立があると思い込んでいた。話をする時に、論争を引き起こすことを恐れていた。さらに、「台湾の人々は異端者だ」とずっと思っていたので、彼らと話すことを拒んでいた。しかし、ある小さな出来事をきっかけに、僕の認識は変わった。あの日、僕たちは島内を歩き回っていたが、すぐに道に迷ったことに気付いた。僕たちは、一人の白髪の老人男性に出会った。よろよろと歩きながら、方言で挨拶をしてきた老人に、僕たちは自己紹介をし、中国本土から来たこと、ここで道に迷ってしまったことを告げた。

「もうじき雨が降る」と老人は言うと、交番までの道案内をしてくれた。交番へ向かう途中、僕たちのバックグラウンドを知っていた老人は、知られざる物語を話してくれた。

長年、中国による封鎖のため、表立った経済貿易は禁じられていた。それにも関わらず、対立する政治的環境の中で暮らす人々は、密かに貿易を行い、双方が「幸福」と主張するものを追い求めていたそうだった。

「対岸に住む」人と交流するのは、僕にとって初めてのことだった。

交番に到着すると、老人は微笑みながら頷き、去っていった。

その日の出来事をきっかけに、僕は、もともと持っていた認識が揺らぐ中、積極的に島民に話しかけるようになった。僕は、地下の家にひっそりと暮らし、毎日、高齢で盲目の夫の手を取って介助をしている老女に話しかけた。僕が中国出身であることを知ると、食事に誘ってくれた。幼い子どもたちは、思っていた以上に純粋で、頑固な政治観など持っていなかった。対岸からの旅行者の僕を歓迎し、自分たちの学校へ招いてくれた。

島の人々と交流するうちに、時間が過ぎていった。蘭嶼（オーキッド島）を発つ日の午後、台風が接近

していたため、僕たちは港の待合室で足止めされていた。船に乗れなければ、その後のフライトに間に合わないのではないかと心配だった。3時間待たされた後、スタッフから残念な知らせが告げられた。僕たちは3人だが、2席しか残っていないという。驚いたことに、僕たちの状況を知っていた1人の台湾人が、「私は急いでいないが、あなたたちは急いでいるでしょう」と、席を譲ってくれたのだ。その人のお陰で、僕たちはその後のフライトに間に合った。

僕は罪悪感しか覚えなかった。10年に及ぶ偏見と無知な葛藤が消えゆく中、この島を訪れる前は僕自身が目を背けていた、温かさと相互理解と寛容さに満ち溢れた世界の一部が、自分の前に現れた。

「民族紛争は、民族集団が同じ目標、特に権力や資源へのアクセス、領土などを巡って競合する場合に発生する」。台湾から帰国後、グーグルで検索し、この説明を見つけた。

僕はすぐに蘭嶼（オーキッド島）で過ごした日々を思い出した。そして、「民族紛争を克服する唯一のものは、人類が本来持っている輝きである」という言葉が頭に浮かんだ。これは、蘭嶼（オーキッド島）での生活で得た価値の本質を具現化した言葉だ。

中国と台湾の対立は、やがて穏やかな形で終焉を迎えるだろう。それは、僕たち一人ひとり、即ち地球に住む子どもたちや社会の中の個々人が突破口を見つけることによって可能となる。インターナショナルスクールで学ぶ生徒の僕は、模擬国連（MUN）クラブに所属している。関連する活動に参加し、偏見や固有の認識を見つけ出そうとしている。自分の学校に交換留学生がやって来る時は、いつもサポート役を務めている。全ては蘭嶼（オーキッド島）旅行から始まった。僕、そして社会全体が、対立する二つの国同士のギャップを乗り越え、固有の認識の対立を超えることを可能にする、突破口を必要としているだけなのかも知れない。それは、たった一度の会話だったり、挨拶だったり、握手だったりするかも知れない。

歴史の車輪は前へ進む。蘭嶼（オーキッド島）の上空の下に暮らす人々は、車輪が道の上を転がった後に残る轍（わだち）となるだろう。

嵐の後の虹

(原文は英語)

キウ・ザー・バオ (20 歳)

ベトナム

ベトナム外交アカデミー

僕は 18 歳の誕生日に、ゲイであることを両親にカミングアウトした。和気あいあいとしたパーティーは稲妻によって引き裂かれ、陰鬱で張り詰めた雰囲気が残った。

両親は、僕がゲイであることに、攻撃的に反応した。助言を与えようとした後、罵声を浴びせ、「ストレートに戻らないなら、家から出て行け」と僕を脅した。僕も自分の感情を制御できずに、口答えした。僕の方も攻撃的になった。家族は徐々に対立の闇の中に落ちていった。激しい嵐が吹き荒れた。

数日間、土砂降りの雨が降り続いた。衝突に次ぐ衝突で、稲妻が激しくぶつかり合うように、僕と両親は言葉の応酬でお互いを傷つけ合った。どちらも、相手に耳を貸すことなく、自分の意見を守ろうとした。

嵐は 1 年以上続いた。両親は、僕を「同性愛者の病気治療専門の信頼できるクリニック」に通うよう強要した。僕は疲れ果ててしまい、次第に両親との会話を一切避けるようになった。

そこで僕は、衝突を避けたり、攻撃的に口論をしたりすることは、状況を悪化させるだけだということに気付いた。今回、どのように敬意を払いながら両親の話に耳を傾けるべきか、相手の立場に立って心配や恐れを理解するべきかを学んだ。ベトナムを含めて、一部の国々では、同性愛は未だにデリケートな話題だ。そうした国々では、依然として、両親のように多くの人々が、この話題に関する確かな情報にアクセスすることができない。同性愛が従来考えられていたようなものではない、ということを知ってもらえる一助となるよう、僕は両親に、LGBTQ+ コミュニティについて客観的に説明し、この問題についての不安の解消を図った。

1 年以上経って、両親との関係は幾分か改善した。両親は、今なお、僕の性的指向を完全には受け入れることができないでいるが、僕の決断に関しては、よりオープンになり、尊重してくれるようになった。激しい嵐はゆっくりと去り、空は明るくなった。太陽の光が差し、カラフルな虹がかかるだろう。

この道のりを通して、僕は多くのことを学んだ。第一に、対立は避けられないということ。対立を避けることは状況を悪化させるだけだ。そうではなく、対立に立ち向かい、一緒に解決策を探ることが必要なのだ。第二に、対立を解決するための鍵はコミュニケーションであること。どのような議論であろうと、無条件に自分の意見を守ろうとするのではなく、双方がお互いの意見に耳を傾け、尊重することが必要だ。第三に、数日のうちに片づく問題ではないので、忍耐も重要であること。双方が落ち着いて

自分が何を考えているのかを省みるためには、時間と忍耐が必要だ。そうすれば、徐々にお互いを受け入れられるようになる。

個人的なレベルでは、この道のりは、忍耐力を身に付け、オープンなコミュニケーションを実践する機会を、僕に与えてくれた。今では、対立を避けるよりも、対話によって対立を解消することを好むようになった。オープンなコミュニケーションを育むことで、違いを脅威と見なすのではなく、成長の機会と捉えられるような、より強固で有意義な関係性を築いていきたいと考えている。

さらに、僕は自分の経験を活かして、人々が違いを尊重し受け入れる、より良い社会に貢献しようと努力している。LGBTQ+コミュニティ全体にとって、僕の経験は、愛と忍耐の両方を持って自分自身を擁護することの大切さを示している。カミングアウトは、必ずしも容易ではないが、だからと言って、僕たちがベストを尽くそうとし続けることは不可能ではない。僕の体験談は、同じ試練に直面している他の人たちにとって、希望の灯台となるかも知れない。受容とは、時に困難の末に達成され得るものではあるが、戦う価値のあるものであることを、証明できるかも知れない。LGBTQ+の人たちに限らず、女性や社会のその他のマイノリティの人たちには、どうか常に強くあってほしい。

僕はちっぽけな人間に過ぎないかも知れない。多くの人々は、僕が世界を変えることは不可能だと思うかも知れない。しかし、僕のストーリーは自分のものだけでなく、あちこちにいる大勢の人々のものでもあると思う。僕は、ベトナム遠隔地の子どもたちのためのパシフィック・リンクス財団による2023年のサマーキャンプ、エンパワー・ウィメン・アジア・プロジェクト、そして最近では、ASEANユース・アドボケイツ・ネットワーク (AYAN) などの複数の場で、自分の体験談を分かち合ってきた。僕は世界を変えられると信じている。僕のストーリーがより多くの人々に届き、それによって、人々がマイノリティを対立や嫌悪ではなく、愛と思いやりで受け止めてくれる、より良い世界を築くために貢献できると信じている。

あるアフガニスタンの少女の成功物語

(原文は英語)

ジャミラ・フサイニ (22 歳)

アフガニスタン<米国在住>

トリニティ大学

「全身を覆い隠しなさい！ 化粧も、鮮やかな色を身に着けるのも禁止です！ 家の中にいなさい！ 教育を受けることは禁止です！ 立場をわきまなさい！」

こうした言葉が、私に、そして私の国の少女一人ひとりに向けて、テレビから流れていた。小さくて美しいこの世界に目を開けた瞬間から、この作文を書いている時に至るまで、自分の人生は葛藤の連続であることを私は知っていた。「おめでとうございます！ 女の子です」と、医師が私の父に微笑みながら告げたその時から、全ては始まった。両親は大喜びしたが、その喜びがいつまで続くのか、あとのどれくらいの間、両親が私を外界から守れるのかは誰にも分からなかった。

私は成長するにつれて、自分には課せられた限界などないと思うようになった。私は、うっとりするような祖国の青空を自由に飛び回る鳥のように、そしてラッキーな少女のように、幸せに暮らし始めた。自転車で学校に通い、他の女の子たちと遊びに出かけ、きらきら光る赤いスカーフを身に付け、夢を語るようになった。

人生は完璧だと思えたが、長くは続かなかった。気が付けば、私は自分の国で、自分が始めたものでも望んだものでもない戦争の結末に直面せざるを得なかった。タリバンという母の話でしか聞いたことのない、恐ろしい集団がアフガニスタンを支配したのだ。母は自身の若い頃に、タリバンが彼女の全て——教師になる夢も、友人たちも、権利も、家も、そして安全も——をどのように奪ったかを語って聞かせてくれた。2021 年 8 月にタリバンが私の住む町に侵攻し、私を同じ運命に陥れた。

高校に入学して以来、私は懸命に医学を学んできた。私のたった一つの進路は、毎年アフガニスタン全土からたった 70 人の女子学生しか受け入れない、カブール医科大学に進学することだった。この大学へ合格することの難しさには、私は決して怯まなかったが、国の政治情勢は私を脅かした。私がカブール医科大学への合否がかかった大学入学共通テストの結果を見ていた、まさにその時、タリバンが女子の通学を禁止した。タリバンは女性が男性の付き添いなしで外出することを禁じ、女性は教育を受けたり働いたりすることが、遠い夢になってしまった。

私は葛藤の中で途方に暮れた。最初の葛藤は、自分自身との葛藤、即ち状況を受け入れ、自分の命を守ることだった。もう一つは、タリバン政権下で自分の夢を追い求めるという葛藤だった。私は両方の試練を乗り越え、自身の道を切り開くことを選んだ。私は、妹や近所の女の子何人かに勉強を教え始め

た。彼女たちは喜んで学び、私も教えるのを楽しんでいた。しかし、「私はある程度までしか、彼女たちに勉強を教えることはできない。教えられることが何もなくなったら、どうなるのだろう。医者になる夢はどうなってしまうのだろう」という悩みで、頭の中が一杯だった。

接続が不安定な自宅のインターネットを使って、アフガニスタン国外で、私の志を評価し、目標達成を手助けしてくれる場を探し始めた。私は、何カ月もかけて、様々な大学に願書を提出した。経済的に不安定であるという理由で、大部分の大学は受け入れてくれなかった。彼らは、私が生き延びるための代償を夢で支払っていることを知らなかった。20 を超える大学へ出願した後、私は米国で 2 つの全額支給奨学金をもらうことができ、ある非営利組織がアフガニスタンからの渡米を支援してくれることになった。現在、私はトリニティ大学でバイオメディカルエンジニアリングを専攻する新 2 年生だ。

こうして私は葛藤を乗り越えたが、まだ先は長いと考えている。この道のりから、自分の物語を書くのは私自身であること、そして人生がどれほど困難であろうとも、また、どれほど困難になり得ようとも、自分が手に入れるべきものを決して諦めてはならないということを学んだ。現在、私は、アフガニスタンの女子学生向けにオンライン教育のプログラムを提供し、彼女たちがアフガニスタン国外で教育の機会を探すのを支援する非営利組織に関わっている。また、この夏には、アフガニスタンの少女たちの才能を世界に紹介するため、絵画、イラスト、音楽、詩などの創作物を展示するウェブサイトを立ち上げている。私は、今ある全てのチャンスを生かして、皆にとってより良い世界を目指す小さな一歩を踏み出している。そして、この一歩一歩が、大きな変化の先駆けになると信じている。

荒波を乗り越えて

(原文は英語)

マーク・ウォルトン (10 歳)

インドネシア

印尼泗水台湾學校

予測できない人生の旅路の中で起きる対立は、自分と世界との間の戦いのことだと思っていました。その頃の僕が武器にしていたのは自尊心で、それを議論に勝つために使っていました。でもこの考え方は、親友たちとの対立をきっかけに、一変しました。その対立の経験は、僕を深い悲しみに突き落とし、自分の生活の中で生じるすべての議論とそれに対処する方法についてよく考えるように、僕を導いてくれました。

学校の英語グループプロジェクトのキャプテンを決める時、親しい友人の何人かが僕に推薦してくれたことが全ての始まりでした。僕は英語が得意だったので、みんなをうまく引っ張っていけるだろうと彼らは信じてくれたのです。親友たちに信頼され評価されていると感じ、僕はとてもうれしかったです。だけど、その後、大きな嵐のような予想外の問題にぶつかりました。

その嵐は別の生徒が思い付いた、ずる賢い計画で起こりました。僕はトイレで、偶然、彼の計画の全てを立ち聞きしてしまい、彼が何をしたのか知りました。この生徒は僕にやきもちを焼いて、僕の代わりにキャプテンになろうとしていたのです。彼は僕の友だちを学校のトイレにこっそり呼び出し、僕ではなく、「自分をキャプテンに選ばば新しいおもちゃやお菓子を渡す」と約束しました。僕は誰も彼の計画には従わずに僕に投票してくれると思っていました。しかし、教室にはひそひそ声が広がり、明らかにグループの間で意見が割れていることが分かりました。最終的には、彼の約束に揺らいで、みんな意見を変えました。グループのメンバーは誰も彼を疑うことなく、彼の計画は完璧に成功しました。彼はそれがどんなに間違っているかをメンバーに気づかせることなく、自分のしかけたわなに誘い込みました。そしてついに彼はキャプテンに選ばれました。

彼らと顔を合わせた時、僕は何も問題ないようなふりをするしかありませんでした。でも、心の中ではとても傷つき、腹が立っていました。彼らのせいで僕は質問責めの海におぼれ、力強い船だった僕の自尊心は、壊れやすいいかに変わってしまいました。僕は一人で座りながら、「僕は彼らのキャプテンになれるほど、頭が良くなかったのかな」と考え込みました。仲が良かったと思っていた友だちは、いとも簡単に、僕の役割をグループキャプテンから何も役割のない人に引きずり降ろしたのです。

5 日間かけて、みんなの理解を得ようとがんばって、疲れ果てた頃、僕にやきもちを焼いていた本人が、僕のところにやって来て、なぜあんなことをしたのか説明してくれました。彼が言うには、もともと

と僕や僕の親友たちとずっと仲良くなりたかったのだけれど、今回実行した計画以外の方法が思いつかなくてやった、ということでした。彼は自分がやったことは身勝手だったことに気づき、最後は、僕と他の友だちにも謝ってくれました。そして、次の英語のグループプロジェクトでは、僕にグループキャプテンの座を返してくれました。

僕は彼を許しました。なぜなら、この対立を通して、彼の間違いだけでなく、僕の過ちにも気づくことができたからです。グループキャプテンという肩書きによって、僕はごう慢と言えるくらいに自信満々になっていました。このことで、みんなと同じように僕も間違いを犯すことがあり、成長の過程で学ぶべきことがたくさんあることが分かりました。この対立は、僕がプライドを捨てるきっかけになりました。はじめは大変だったとしても、プライドを捨てて、何事にも良い面を見つけるよう心がけることを教えてもらったので、僕はとてもうれしかったです。

荒波を乗り越えた今、僕は本当の意味で、キャプテンになるというのはどういうことかを考えています。それは、選ばれることでも、自分が気分良くなるために肩書を得ることでもありません。それは、他の人の状況に思いやりを持つことです。対立が起きた時には、優しく思いやりのある視点を持って、判断しなくてはならないことを理解する必要があります。それでこそ、より多くのものを得て、他の人に平和的な影響を与えることができるのです。自分を理解してもらおうとする以前に、まずは他の人を理解しようとする方が良いということを僕は学びました。

二人きりの短い道德の時間

(原文)

小袋 秀悟 (11 歳)

東京都

国本小学校

「返せよ」

「何言ってるんだよ、僕のボールだよ」

今から 4 年前、僕はその時一番仲が良い友達と今のところ人生で 1 位、2 位を争うくらいの大げんかをしていた。それは楽しいはずの学級の授業でドッチボールをしていた時の事だ。外野に行った僕と友達がほとんど同じタイミングでボールをキャッチした。その時にボールをどっちがとるかのけんかになってしまったのだ。今の僕ならけんかに発展させたくないで、

「いいよ、あげる」

とゆずってあげていたと思うが、その時は、どちらも熱くなっていて、ゆずることができなかった。そのけんかはなぐり合いにまで発展してしまった。先生に、なぜそのようになったのか、なぜゆずり合うことができなかったのかを問われた。しかし僕達は、

「熱くなっていたからです」

としか答えることができなかった。その理由を今考えてみると早く当てて内野に入りたかったというよくあるものだとしか考えつかない。しかし、問いつめられていた時はあまり覚えていなかったからだと思う。僕達二人は心の中が後悔でいっぱいになっていて、ごめんねを言うことができないままろう下に立ちつくしていた。

そこに今となりのクラスの担任をしている先生が通りかかり、泣いている僕達を気にとめてくれ、

「どうしたの？ なぜ泣いているの？」

と聞いてくれた。なので僕達は事情を説明した。そうしたら、

「自分の悪い所を反省して、心からごめんなさいと言って仲直りをすれば良いんだよ」

と言ってくれた。その瞬間、僕は不思議と、頭ではなく、心で全てを理解することができていた。それは、ものすごく短い、心からのごめんなさいという名の道德の授業が行われたかのような感覚だった。その後二人の話し合いが今でも一番に残り、身近での経験ということもあって、それからの心の支えになっていると思う。その後先生にさっき問われたことに答え、僕と友達はおたがいにあやまった。

今まではとにかくごめんなさいを言えばいいやと、何も考えずに、適当に言っていたことが多いように思う。しかし、その二人だけの短い道德の授業の後からは、ちゃんと自分がどうして何をしたこと

がいけなかったのかを考え、改善点を見つけ、

「ごめんなさい」

とあやまっていることができていると思う。

道徳の授業は 4 年たった今でも鮮明に覚えている。僕はもしごめんなさいとは何ですかと聞かれたら、こう答える。

「おたがいに認め合い、信じあって生きている心同士の証です」

と、そして友達とは、今でも成長し合い、競い合えた最高の友達として、今日も昨日もきっと明日もおたがいに笑い合って遊んでいけると思う。

意見の隙間

(原文)

大塚 和々 (13 歳)

兵庫県

三田市立八景中学校

私は幼い頃から、疑問の多い子だった。

何に対しても、なぜ？を連発し、答えが見つからないと、自分で探しに行く。中学校に入学したときには、自分の価値観や意見を持っていた。かちかちに固まった考えだ。

だからだろうか、中学校が窮屈で息苦しかった。

なぜ制服を着るのか。

なぜ生徒を縛る校則が多いのか。

なぜ先生が威張り怒鳴るのか。

なぜ自分の意見を発言する場がないのか。

なぜ、なぜ、なぜ……。

そのうち私は、不登校になった。

小学生の頃から、学校は苦手だったのだが、中学生になって増えた負担が大きくて、ついに行けなくなった。しばらくは、家でじっと過ごしていた。「不登校の子が通う教室がある」と先生から聞いたのだが「そんな場所は学校と変わらない」と自分の意見をゆずらず、家から一步も出なかった。

だが、ある日、私の大切な友達が学校に行きづらくなり、その子に誘われたことがきっかけで、その「不登校の子が通う教室」に行ってみることになった。あまり気は進まないその教室に行くのは、友達の意見であって、自分の意見じゃないから。

しかしー。

そこは私の想像と、全く違う場所だった。

私が教室に入ると、物腰柔らかな先生が、にこにこ微笑みかけてくれた。一方的に説明をするのではなく、私の質問の時間も設けてくれ、緊張していると、笑顔で接してくれた。教室に通う、不登校の生徒は、殻をむいたように自由に過ごしていて、自分に自信を持っているようだった。

私の考えは、間違っていた。いや、間違っていたと言うより、自分の考えを守るあまり、他人の意見を取り入れていなかった。

それから、私はその教室に通っている。

この作文のテーマは、「対立」。対立とは、二つの反対の立場にあるものが向かい合っている様のこと

らしい。私の場合、対立は「学校」と「私」だ。意見や価値観が、私と中学校では全く違ったので、私は中学校から離れた。そして、自分の考えから飛び越えた教室へ足を踏み入れ、その世界に驚いた。

対立を超える、というのが、和解し合うことや、逃げずに頑張ることを言うのなら、私は学校に行くべきなのだろう。けれど、対立から逃げることも大切ではないだろうか。逃げている間に、新しい意見を自分のものにできる。

不登校の選択をした私は、ある意味、逃げたと表現できる。しかし、想像以上にすてきな教室、先生、友達に出会えた。その教室で、私は、たくさんの新しい意見を知った。

私の身近な対立は、学校だ。学校の先生や自分と合わない友達と、対立していた。学校以外にも、例えば、家庭、仕事、SNS などでも、対立は起こるだろう。世界規模で見ると、もっと大きな対立がある。戦争が起こり人々が命を落とすこともある。

まずは、争いをやめ、自分の意見に隙間を空けてみればどうだろうか。きっと、その隙間から、様々な人の意見が心に流れ込み、知らない世界が見えてくる。対立するのではなく、お互いを尊重し合い、意見を交換することが、私達には必要なのかも知れない。

私も、今は中学校に反抗心ばかり燃やしてはいない。校則に納得できない部分は多くある。だが、あの教室に通い、自分の考えに隙間が空いた。教室の先生達が私を尊重してくれたように、私も、中学校を尊重できるようになった。

中学校も、自分の意見に隙間を開け、新たな意見を取り込めば、もっと良い学校になると思う。学校だけではなく、国も同じだ。違う価値観の人々や国と対立せず、自分の考えの壁を柔らかくしてみるといい。

そうすれば、対立を超えることができる。

ヘッドホン

(原文は英語)

松尾 莉愛 (13 歳)

東京都

洗足学園中学高等学校

ヘッドホンが開発されて以来、私たちはポータルで耳をふさぐことで世界に閉じこもってきました。私たちはモーツァルトやマルーン 5 を耳に近づけ、目を閉じ、新しい次元の現実に入り込みます。でも最近、Bluetooth をつなげることで、「個人空間」の尊重と称して、私たちは他者から自分を切り離しています。私たちはカフェや駅などで繰り広げられる会話を不快に感じるようになりました。ヘッドホンをしている人に話しかけたりしたら、よくてもポカンとした顔をされるでしょう。「邪魔をするな」と言われるので、個人空間は壊してはいけません。

これを繰り返せば世界が崩壊してしまいます。

私自身も壁を作ってしまったことがあります。英語を話す帰国子女として日本の学校に転入した時、ヘッドホンはすぐに私の避難所になりました。友好的にたくさん質問をしてきてくれた友だちに、ひどく不自然な日本語で返したため、私は登校初日にして潜在的な友だちを 20 人失いました。社会での恥ずかしさから引きこもろうと、私はヘッドホンをして毎日のように昼休みを過ごしました。同級生たちが楽しそうに Mrs. GREEN APPLE や YOASOBI の話をしたり、完璧に近い点数を見て顔をしかめたりする中、私はエミネムやシーアの曲を聴きながら、国語の宿題と格闘していました。

その頃の私は、ヘッドホンを着けることで、本心では加わりたいと願っていた仲間たちとの会話を自分で遮断していることに気づいていませんでした。私は自ら対立を生んでいたのです。私は次第にそれを「私対世界」、「文化対文化」ととらえるようになりました。クラスの中の小さな社会の仲間に入りたいと願いながら、居心地の良い自分の言葉の世界にこもっていたいとも思っていました。そのため、私は「聞きたくない」と思うようになりました。

しかし、ある日ヘッドホンを自宅に忘れました。すると歌詞以外のものが聞こえてきました。同じクラスの子の一人が振り向いて、「ねえ、マニラにいた時は何を聴いていたの?」と聞いてきたのです。

その時初めて、私は、自分自身が話し、聞いてもらえるチャンスとだと思いました。私は Mrs. GREEN APPLE ファンと YOASOBI サポーターの白熱した論議に耳を傾けました。昼休みが終わる頃には、自分と同じ英語を話す帰国子女や、日本語での会話を好む友だちと出会い、共通の興味を見つけ、模擬国連部やディベート部、オーケストラ部の入部届の用紙を手に入れていました。

いつもと同じ 40 分間という時間の中でしたが、唯一違ったのは「それで、あなたは?」という

会話が合ったこと、そして私の中の「同級生は私の話を聞く気がない」という思い込みも、同級生たちの「彼女（私のこと）は自分たちと話したくない」という思い込みもなかったことでした。

それ以来、ヘッドホンは着けていません。実は、模擬国連部も、ディベート部も、オーケストラ部も、私が聞いて学ぶことを教えてくれている場所なのです。そして、この学びのサイクルは、世界中の人たちが着けている「ヘッドホン」を見つけ、彼らがそれを外して心を開くことを促す活動の一環として、いつの日か平和ジャーナリストになって続けていきたいと思います。

私たちは小さな集団やクラス、国などの周りに冷戦の壁を作ってしまう。そして、どれだけインターネット（*Internet*）が発展しても、人類の相互依存（*interdependence*）を語っても、世界的なメディアのサイクルの中で交流（*interact*）しても、私たちは真の対話から自分たちを切り離し、その過程で自分たちを分断させてしまいます。皮肉なことに、どのソーシャルメディアを開いても、そこには心の中に「ヘッドホン」という壁を作った何十億という人が存在していて、大声で意見を押し付け合うことで日々の平和を脅かす対立を繰り広げているのです。まったくソーシャル（社交）ではありません。それは「聞き手」の絶対的な責任である「排除するのではなく関わること、抑えつけるのではなく質問すること」の軽視に他なりません。

マスクや抗菌アクリル板の仕切りがある生活、国境間の危機、内乱を経て、私たちはそのことに慣れてしまったのかも知れません。しかし、世界中のすべての人たちの耳が、自分の言葉以外をシャットアウトしてしまうのを認めてはいけないのです。私たちは両方の耳を覆うために二つの耳を与えられたわけではありません。片方を開放しておくために二つ与えられたのです。「ヘッドホン」の心地良さを手放し、その代わりにお互いに注意を払うことで、ようやく対立は解消されるのです。

目に見えない戦い

(原文は英語)

ジャスミン・チョン・マン・ヤン (14 歳)

マレーシア

ビーコンハウス・スリ・イナイ・インターナショナルスクール

まだ幼い 7 歳の頃、私は「ソーシャルメディア」という新しい世界に出会いました。インスタグラム、スナップチャット、フェイスブックなど、さまざまなアプリを使っていましたが、誰にも監視されていなかったため、自分の好きなように使っていました。若い時にこれらのプラットフォームに触れることは、あらゆる場面で、人とのつながりができる一方で、他者との比較をもたらすという、諸刃の剣になる可能性があります。

ソーシャルメディア上に集まる、一見完璧に見える美しさや達成不能な基準によって、人は自分の見た目や身体的なイメージに対する疑念や不安を抱くことがあります。私の場合、このような種類のイメージに触れていたことが、長期間にわたる自己破壊的な行動のきっかけとなってしまいました。毎日これらのイメージを見続けた結果、どんな些細なことでも、自分自身のあら探しをするようになってしまいました。はじめは、目の形や口の動き方、肌のきめなど顔のことだけでした。しかし、次第に、お尻の横のへこみや広い肩幅、くびれたウエストなど、身体全体にまでエスカレートしていきました。あらゆる欠点やあらゆる細かいことで、私は不安になりました。それ以来、人の価値はそもそも見た目で決まるものであり、自分は画面上に流れてくる女の子たちのような見た目にはなれない、と思いつつもなっていました。

私は不安と承認欲求という有害な組み合わせに煽られて、危険な自己破壊の道に足を踏み入れてしまいました。私は理想の自分を手に入れることに固執するあまり、どんな手段を使ってでも、手に入れようとし始めました。毎日の食事量を 1 日 3 食から 1 食に満たないくらいに制限し、7 歳児のカロリー摂取量の計算と同じように、食事やおやつの度にカロリー計算をしました。私は執拗に体重を測り、「太る」原因となる特定の食べ物を避けるようにもなりました。なぜなら理想の身体を手に入れることに必死だったからです。

その結果、体重は落ちましたが、やせ過ぎてしまいました。なぜなら、私と同じ身長の子の平均体重より 15 キロも下回ってしまったからです。脚にはいつも力が入らず、体中がだるく、元気が出なかったため、日々の宿題をこなすどころか、階段を下りることさえ非常に困難になっていました。正しくないことを分かっているながらも、その後も 5 年間、こんな食生活を続けました。

最悪の事態になってやっと、このままではいけない、この食生活を改めなければ、近い内に自分の命

すら危うくなってしまうことに気づけました。以前のように、罪の意識を持たずに食べ始めるのはとても難しいことでした。一口食べる毎に自分のことを恥ずかしく思い、自己嫌悪を覚えました。でも、これは回復に向かう上でとても大切な変化のステップであると分かっていたので、どれ程、罪悪感を覚えようと続けました。その内に、極度の減量は利益以上に有害であることに気づき、スクールカウンセラーに救いを求めることにしたのです。

そして徐々に、一歩ずつ、健康的な食生活を取り戻すことができました。食べ物を否定的に見ていたため、親しい友人や家族、先生、カウンセラーなど、周りの人々が支えてくれていたにも関わらず、自分と食べ物との関係を再構築することは困難なことでした。でも、食べ物は決して脅威ではなく、むしろすべての人の命にとって必要不可欠な要素であると学ぶことができました。

体調が回復に向かう中で、私は自分を支えてくれる強い仲間との存在と同じくらい、自分自身を思いやることの大切さに気づきました。自分に対し、厳しく批判的であるよりも、自分を思いやるよう心がけ、自分が他人を扱うように、自分自身も大切に扱わなければならない価値のある存在である、と自らに言い聞かせています。

数年にわたる拒食症の経験を通して、同じ症状の人たちがどのような行動をするかを知りました。そのため、誰かが以前の私と同じような状態にあると感じた時は、アドバイスをしてあげたり、手を差し伸べたりするようにしています。もし拒食症の克服は無理と感じている人がいたら、私自身が可能であった実体験を手本として示すことで、その人の手助けになりたいと思っています。

私は、自分が他者の目にどう映るかではなく、ありのままの自分を愛することを学ぶ必要がありました。他の人たちもそうあってほしいと願っています。

生きるために私を奮い立たせてくれた母の死

(原文は英語)

チャリーン・ハリジャント (15 歳)

インドネシア

SMA シトラ・ベルカット・スラバヤ校

2012 年 10 月 9 日、私の 4 歳の誕生日の 10 日前でした。幼稚園で友達と遊んでいた私は、急に先生に呼ばれ、教室を出て早退するようと言われました。幼かった私には、父がなぜ辛そうな目をしているのか、理解できませんでした。家に着いた私は言葉を失いました。最愛の母が亡くなったのです。幼かった私は現実を受け入れられませんでした。信じられませんでした。いつも私のそばにいてくれた人が、突然いなくなってしまったからです。母は大きな夢を持った人でした。その夢を叶えるためにはどんな苦勞もいとわず、私が小さい頃にはいつも新しいことを教えてくれました。母の情熱と意志の強さは、私の中に忘れ難い印象を残しました。

母が亡くなって以来、家族の誰とも、とりわけ父とは、距離を感じるようになりました。家族全員がそれぞれの悲しみに対処していたので、私は自分が部外者であるように感じられました。やがて孤独を感じ、頼れる人が誰もいなくなりました。心づもりができていないにも関わらず、責任が持たされる世界へと押し込まれたのです。何でも自分でやらねばならず、失敗することもありました。私はいつも周りから誤解され、素行の悪い子どもと見なされました。しかし、私はただこの世界をたった一人で理解しようともがいていただけなのです。

父が私を拒絶し、私に対して失望する態度に、私は深く悩みました。自分に残された片親を失うことを考えると、たまらない気分でした。私は、学業の成績で自分の価値を証明しようとしてしました。自分の価値を証明することで、父がもっと自分のことを気にかけてくれるかも知れないと思ったのです。しかし、それは間違いでした。

「君の姉さんはもっとよくやったぞ」。

「だからどうしたって言うんだ。テストで 95 点を取るくらい、そう難しいことじゃないだろう」。

私は落胆し、全てを放り出したくなりました。絶望し、自室で泣きながら、自分の夢がどんなに馬鹿げているように見えても、母はいつも私の夢を信じて支えてくれたことを思い出しました。私は母のことを諦めることはできませんでした。他の誰よりも、母にとって誇りの娘でありたいと思いました。その思いが、私に対立を乗り越えるための強さと自信を与えてくれました。私はもはや、誰かの言葉には囚われません。

私はやる気を取り戻しました。しかも、今回は自分自身のために。そして、新しいことに挑戦し始め

ました。最初は手当たり次第でしたが、自分が最も興味を惹かれるのがテクノロジーであることに気づきました。父は常々、テクノロジーの世界に親しんでいたのも、自分と父とを繋ぐ手段として、私はテクノロジーのことをより深く学び始めました。共通の興味を通して父と繋がり、私は喜びを感じました。

ある日、父はサイバーセキュリティの話題に触れました。当時の私はそれが何なのかさっぱり分かりませんでしたが、もっと詳しく知りたいと思いました。父に、ある講座を受けさせてもらったのをきっかけに、私はサイバーセキュリティに熱中になりました。勉強の末、サイバーセキュリティについて学習できるオリジナルのゲーム開発を始めました。ゲームで周りの人々を助けようと考えたのです。私は一人ぼっちの時、途方に暮れ、打ちのめされることがよくありました。そのため、前に進むことが妨げられ、希望を失っていました。私の目標は、皆、とりわけ自分と同じような思いを抱いている人々にとって、より前に進みやすい道を作り出すことです。情熱と過去の苦しみの体験を掛け合わせることで、社会のために役立てられる自分の長所を引き出すことができました。

自分自身を見つめ直し始めた頃は、時が癒してくれるとは思ってもみませんでした。私は家族と仲直りし、理解し、共感することを学びつつあります。母の死という出来事は、家族全員、とりわけ父に大きな影響を与えました。家族の悲しみを認めないまま、自分のことを理解してほしいと迫るべきではありません。時が経つにつれ、家族全員が再びお互いのことを気遣えるようになりました。

対立を乗り越える上では、難しいこともあります。それが、生活をがらりと変えるようなものである場合は尚更です。悲しみや孤独を感じたり、混乱したりすることもあるでしょう。しかし、生き続けなければならないということを覚えておきましょう。愛する人々に敬意を払わなければなりません。私の年齢では、まだ母がどんな希望を抱いていたのかを理解できてはいません。ただ私が分かっているのは、母は私に夢を追い続けてほしかっただろうということです。私の情熱についての気づきを、他の人たちと分かち合い、そこから学んでもらえるようなサポートをしたいです。母は私の中で生き続けます。母の夢と情熱を前に進めながら、母との思い出を大切にしていきたいと思います。

選択肢と価値観の対立

(原文)

北村 華桜里 (18 歳)

大阪府

城南学園高等学校

私は私の中の二つの価値観の対立に苦しんだ経験がある。それは高校に進学してからのことだ。私は6歳から空手を始め、中学では日本一を目指して中高一貫の空手の強豪校に進学した。当初は空手をするために選んだ学校で勉強することにはあまり関心がなかったが、次第に勉強にも関心を持つようになり担任の先生と相談して高校では特進クラスに進級することに決めた。

空手道部では特進クラスに進学する選手は少なく、両立が可能であることを証明する先輩の例も少なかった。それでも私は自分で決めたからには空手では日本一、大学は難関大学に合格することをやり遂げようと決心した。はずだった。

高校入学後すぐに中学までとは比べ物にならない取り扱う問題のレベルの高さや、課題と小テストの量に苦しんだ。さらに部活動の身体的な疲れと勉強時間のために睡眠時間を削ったことによる寝不足にも悩まされた。「二兎を追うものは一兎も得ず」や「正直、両立は不可能だと思う」という言葉に特進を選んだことを後悔し、空手に専念したいと思い始めた。私が日本一を目指す団体形は一人一人の力がとても影響するもので、私ができないことでチームに迷惑をかけるのは嫌だった。部活で汗を流す仲間を見て、なぜこんなに空手を頑張っているのにそれだけでは行きたい大学に行けないのかと疑問にも思うようになった。

しかしその一方で、勉強を頑張りたい自分もいた。難関大学に行くことで自分よりずっと豊富な知識を持っている色々な人に出会い、知らない世界を知りたいと思った。特進コースで先生方や先輩方のお話を聞いて一生懸命勉強することで得られるものは沢山あるのだと知った。「為せば成る 為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の為さぬなりけり」という言葉に鼓舞され、先例が少ないからこそ自分が両立をやりきることがいつか少しでも同じように悩む後輩の心の支えになれるかもしれないと思った。何より、両立をやりきった自分とそうでない自分とでは、行き着く先で見えるものは違うのではないかと思った。

長い間空手に専念したい自分と両立したい自分との間で葛藤した。とても苦しい時間だったが、幸いなことに私は環境に恵まれていた。部活動の仲間は迷惑をかけているにも関わらず、いつも「がんばれ」と声をかけてくれた。学校の先生方も部活動の先生方も真摯に向き合ってくれた。そして私は両立する自分を選んだ。もちろんそれによって何かを失うのではないかという恐怖もあった。自分の

せいで試合に負けたときは本当に申し訳なく、辛かった。それでも空手において絶対に勉強が言い訳や敗因にならないように、勉強においても空手が言い訳にならないように努力することにした。

最終的に、夢だった日本一は叶わなかった。とても悔しかったし、そこで終わりにするのはやるせない気持ちもあった。でも私は自分の全力を出し切ることができたと思うし、選んだ道を後悔はしていない。

この経験を通して私が学んだことは二つある。一つ目は選択肢に対して自分の中に対立する価値観が生まれた時、自分の理想の未来から遡って考えることが大切だということだ。進みたい道が二つあっても、体は一つしかないから一つの道しか選べない。でもその選択の連続が未来の自分を形づくることになるなら、なりたい自分から考えるべきではないだろうか。私はこの学びをこれから先、再び分かれ道で悩んだときに生かしたい。二つ目は「周囲」の存在の大切さだ。私が後悔のない選択をすることができたのは、悩む私に寄り添ってくれる周囲の存在があったからだ。どうすべきか悩んでいる人があるなら、一緒に悩んだり考えたりする周囲の一部となることが重要だと思う。そしてその人が進む道を決めたなら、周囲の人は励まし、支え、見守ってほしい。私もこれから先、同じように枝分かれの間に佇む誰かに出逢ったら、寄り添えるような周囲になりたい。

愛を選ぶ

(原文は英語)

ナー・アマヌア・アックワー (18 歳)

ガーナ

セント・アデレード高校 (アクラ市)

前回の夏休みの数週間前、クラスメートと私に、コミュニティサービスのプロジェクトの一環で、社会の恵まれない人々を助けるための資金集めの課題が出されました。会合を開き、何度か議論を重ね、3 日間の学園祭でフェイスペインティングのイベントを催したり、自分たちの絵画を売ったりして、資金を集め、児童養護施設に寄付することにしました。

1 週間かけて企画し、いくつかの係が割り振られました。親友のミナと私は会計係になりました。何の問題も起こるはずはないと思っていました。私たちは、数学が得意だけでなく、保育園の頃からの親友だからです。イベント初日の売り上げはやや低調でしたが、3 日目には予想収益を 50% 以上も上回りました。学園祭の後、私たちは児童養護施設に寄付する方法を話し合うため、最後の会合を開こうと決めました。ミナと私は、売り上げの計算もしました。会合まであと 1 週間になった時、ミナからテキストメッセージが届きました。彼女は、売り上げの一部を懐に入れて、2 人で分け合おうと提案してきたのです。

最初私は冗談だと思い、笑い飛ばしました。しかし、彼女は何度もその話題を持ち出しました。私が思いきって電話をかけてみると、彼女は冗談ではないと認めました。驚きのあまり、私は彼女が説明しようとする前に、咄嗟に電話を切りました。親友が泥棒だなどということがあるのでしょうか。私は直ぐにあらゆる SNS プラットフォームで彼女をブロックし、数日間、彼女のことを無視しました。しかし、会合の前日、彼女は私の家を訪ねてきて、説明だけさせてほしいと言いました。

ミナは、お母さんがどれほど重い腎臓の病気かということ、お母さんの医療費の足しにするために資金を懐に入れようと思ったことを、話しました。それを聞いてとても驚きました。もちろん、お金を盗む言い訳にはなりません、理由を知っているのと知らないのとでは大違いです。私は、彼女の説明に耳を傾けようとしなかったことを謝り、彼女は盗みを提案したことを謝りました。私たちは長い時間、話しました。一番大事なことは、私たちの友情は共に闘う価値があると心に決めたことでした。

会合の日、ミナと私は (ミナのお母さんが治療を受けていた) コレブ教育病院の腎臓内科に寄付しようと、仲間たちを訴えることにしました。反対者がいなかったため、私たちはお金を一切盗むことなく、ミナのお母さんの治療費を援助することができました。

ミナのお母さんは、数週間前に亡くなりました。しかし、ミナとの短い喧嘩は私に多くの教訓を与え

てくれました。1つ目の学びは、誰かを直ぐに拒絶しないこと。「キャンセル・カルチャー」という言葉がこれほど一般的になっている今の世界では、多くの人々が、自分と違う意見や価値観を持つ人を即座に切り捨ててしまいます。私はミナとの喧嘩から、相手の行動の理由に自ら進んで耳を傾けるべきであったこと、そうすることで意見を交わすことができたことを学びました。結局、誰かを突き放しても、その人の意見を変えることはできず、美しい関係を壊してしまうだけの場合もあるのです。

また、ある問題についての気持ちを表現することの大切さについても学びました。ミナが、資金の一部を懐に入れようと言った時、彼女の行為に対する自分の考えすら伝えないまま、私は、彼女を自分の人生から排除しようとしてしました。自分たちに影響を及ぼす問題についての感情を、皆で分かち合い、賛成または反対を表明し、合意に至ることができた時、社会は繁栄するのだと思います。

ミナと私は、コミュニティ内の腎臓病患者を支援するための基金を立ち上げることにしました。私たちは、違いを解消することで愛を育んでいこうと決意しました。きっと多くの命を救えると願っています。

畑と川に流れる血を止める

(原文は英語)

ボルワティフェ・ホーリネス・アラグベ (21 歳)

ナイジェリア

イバダン大学

今回も、殺人と放火の日々が続いているさなかだった。安全そうな場所が見つかるまで、私は走った。2 人の子どもたちが、背後に血を滴らせながら私の方へ走ってきた。私は、自分と人々のことを思い、涙を流した。

私が住むコミュニティは、主にタパ族とフラニ族という 2 つの民族集団で構成されていた。主としてタパ族は農業、フラニ族は畜牛業を営んでいた。

コミュニティ内の唯一の水源は川だった。フラニ族の牛たちは川から直接水を飲み、水をかき回すため、川の水は汚れ、タパ族は家事用の清潔な水を確保できなくなっていた。このため、タパ族の住民が川に行く時は、常に牛を追い払えるように完全武装していた。フラニ族も、牛が水を飲むのを阻もうとする者と戦えるよう、武器を携えて川へ出かけた。このように、いつも対立や争いが起こることになった。

更に、フラニ族が所有する農地の大部分は不毛な土地であり、牛が食べる草がほんのわずかしかなかった。制御不能になった牛の群れが、タパ族の農作物を食べてしまうこともあった。一方のタパ族の川岸近くの肥沃な土地は肥沃だった。このような理由で、あるいは牛が川の水を汚すという理由で、争いが絶えなかった。

あの日、私は、変革者になろうと決心した。争いが静まった次の週の夕方、私は水がめを持って川へ出かけた。フラニ族の牛飼いたちが、再び牛に水を飲ませ水をかき回しに集まり始めた時、私はにこやかに彼らに挨拶し、牛が飲めるように川から水を汲んでくることを申し出た。そうすれば、牛たちが川から直接水を飲むことはなくなるからだ。嬉しかったことに、彼らが同意してくれたので、私は急いで川から水を汲み始めた。その間、牛たちは川から適度に離れた場所で水を飲んでいて、その日の水は、家庭用水に使えるほど、清潔かつ新鮮で、川から牛を追い払うために暴力的な手段に訴える必要もなかった。

私はこの活動をしばらく続けた。フラニ族の若者である同じ学校の生徒たちが加わり、一緒に牛の飲み水を汲むようになった。ほどなく、生徒たちの友人も加わり、フラニ族の若者のほぼ全員、牛が川から直接水を飲ませないようにするのが習慣化した。

次に私は、牛たちの牧草の問題を解決する方法を探し始めた。フラニ族の若者であるクラスの同級

生に、牛糞の処理を手伝うことを申し出た。農業の授業で、人間や動物の排泄物が農地の肥料になることを学んだことがあった。そこで私は、それまでずっと不毛だった広大な痩せ地に、牛糞を集めた。私はこれを数カ月間続けた。

間もなく、ずっと不毛だった土地が肥沃になり、草が生え始めた。その後、牛は生えた草を食べられるようになり、人々の農作物を食べずに済んだ。その年は久々に、争いや衝突が起こらなかった。私はフラ二族の人々に、牛糞は草の生育を促すので、牛糞を農地に常に貯めておくように勧めた。彼らが慣れるまで、時にはその作業を手伝った。

私はコミュニティの小さなヒーローとなった。まさにこの出来事から、私は数々の教訓を得た。

第一に、**争いのさなかに武力や武器を使えば、必ず問題が悪化し、コミュニティをほぼ丸ごと消滅させてしまうこと。**長い目で見れば双方にとって不利益な結果をもたらす。

第二に、争いは利害の衝突の結果であるので、**それぞれ当事者がどんな利益を守ろうとしているのかを知る**ことが争いを解決するための第一歩だということ。つまり、争いの種は何か、各当事者が本当に望んでいるものは何かということだ。

第三に、**相手の当事者を傷付けることなく、相手の利益を守る方法を各当事者が見つけなければならない**ということ。

最後に、**交渉と譲歩をしなければならない**ということ。それぞれの当事者に、ある程度相手に対して譲歩する用意がなければならない。

これらを実践していくことによって、私たちは争いを平和的に解決し、より安全な世界を作っていくようになるであろう。

立ち直ろう

(原文は英語)

タマレ・エノック (23 歳)

ウガンダ

2025 年。恐怖と眠れぬ夜が、私の思考に影を落とす年。また、選挙運動が行われる年だ。この数年間に何が起きたかを私は知っている。流血、暴力、誘拐、カオス、暗殺。これが政治だ。

大人になった私は、自分たちを虐げ、自国を政治的特色のシンボリズムに
分断する法律を支持する政治家たちに義憤した。

私は、政治論争に巻き込まれそうな、あらゆるものから距離を置いた。最終的な代償を支払うのはいつも罪なき人々だからだ。私は巻き込まれないようにそこから立ち去り、有害な言葉から自分の身を守った。

しかし、どれほど隠れようとしても、対立は避けられない。
油断していると、予想外のことが起こる。

2020 年 11 月 17 日、選挙運動のさなかだった。政治は混乱を極め、全国民が主導権争いの結末の辛酸を舐めさせられた。美しかった日が午後には黒い煙に包まれた。反対派リーダーの逮捕に対する抗議活動が全国各地で起こったのだ。

新型コロナウイルス感染症の流行のため、私はカンパラの街で、学校にも行かず、行き詰まり、混乱しながら、屋台で物売りをしていた。道路は封鎖され、車も動かない。軍から暴力を受けたり撃たれたりしないよう、そして運良く、怒った群衆からも逃れられるよう、両手を挙げて 3.7 キロメートルの帰路を歩かなければならなかった。

仕事からの帰り道、友人が悲劇的にも流れ弾に当たったという電話を受けた。警察は事件後に立ち去り、興奮状態の群衆は彼の遺体を道路の真ん中に放置した。群衆は誰かが遺体を運び出すのを許さなかった。彼らは遺体を、与党の地元選出議員だった友人の母親をおびき出すのに利用したのだ。

現場に到着し、私たちが全てを失ってしまったことを目の当たりにし、私の心は砕けた。憎悪、怒り、報復、人間的ではない感情が、私の心を支配していた。

これは私の心の中の葛藤の端緒となった。私が政治家たちにどのような思いを抱いていたかはお分かりだろう。しかし、彼は私の親友だった。
たとえ、彼の母親が政治家であろうと。

彼は罪のない少年であることが、群衆には分からないのだろうか。彼の母親には聴覚障害があり、友人は母親の通訳をしていた。母親が手助けを必要としていることは明白だった。

しかし、国民を虐げる政府の政治家を、誰が助けようとするだろう。誰もが差別を恐れ、彼の母親の支持者と見なされるのを恐れていた。私は、賛同してくれた何人かの友人を集め、群衆に立ち向かった。

友人の母親と私は、遺体を運び出させてくれるよう、群衆に嘆願した。私の年齢の能力では、この状況に太刀打ちできなかった。群衆は私たちに襲いかかろうとした。私たちは冷静さを保ち、嘆願した。同じ考えを持った見知らぬ人たちが、私たちに加勢してくれた。やがて、私たちは何とかして友人の遺体を自宅まで運んだ。ニュースでは、54 名が亡くなり、数百名が負傷し置き去りにされたと報じられた。数週間後、私は友人の母親のコミュニケーションの手助けになるため、手話を学び始めた。今では、彼の彼女は私にとって家族のような存在だ。

教訓：平和な社会に生きるためには、私たちは許し、忘れ、違いを受け入れなければならない。

なぜなら、共感、思いやり、協力、愛がなければ、
人間性を喪失し、暴力行為を正当化することにつながりかねないからだ。
ただし、共感、思いやり、協力、愛が私たちの社会に深く根付けば、
逆境に直面する中での回復力や団結が、対立によってもたらされた深い傷を
癒す助けになるかも知れない。

また、対立を解決するためには、積極的傾聴、調停、忍耐、広い心が必要であることも学んだ。もし私たちが敵対心を抱いて群衆に向かっていったならば、非常に悪い結果がもたらされていたであろう。この事件で私は、「大き過ぎて解決できない対立はない」ということを知った。とにかく自分のエゴを抑え、テーブルを囲み、相手に対し敬意を払いながら境界線を引き、合意に達するまで、進んで譲歩や交渉をしなければならない場合があるのだ。

私はこうした教訓を、自己成長、平和の提唱、そして恨みの解消に役立てたいと考えている。私が思い描いているのは、『国の心を救う』というタイトルの本を書くことだ。これは、私たちの社会にどのように平和を育めるかを扱う内容の本で、対立への対処・解決方法についての手引き書だ。また、インパクトのある短編ノンフィクション作品を書いた。将来、これをもとに、私たちの社会を癒すための教育や啓蒙を目的とする短編動画や小冊子を作る予定だ。これから、立ち直り、平和を選択しよう。そして、来る恐怖の年を変えよう。私たちは豊かな未来を創造できると信じている。私は、未来の先駆者である自分たちのことを信じている。

